人文学報 No. 514-2（社会人類学分野 11）
首都大学東京人文科学研究科、2018. 3

本当はよく知らない「重要な他者」
―― 社会人類学演習Ⅱ インタビュー作品　2017年 ――

田　沼　幸　子

Ⅰ　はじめに

二年目の社会人類学演習Ⅱは、履修者・聴講者が増え、ここに掲載する作品も14本（昨年度は８本）となった。指導の内容はほとんど変わらないので、昨年のものを参照していただきたい［田沼　2017］。ここでは今年、改めて感じたことを述べるにとどめ、学生の作品紹介に移りたい。

作品を提出した15名中、4名が同居する家族にインタビューを行った。これは簡単そうで、実はそうではない。家族に関しては、知っているようで知らないことが多いからだ。対人関係療法を専門とする精神科医の水島広子は、以下のように述べる。私たちの対人関係は、家族・恋人・親友を中心に、その周りを友人・親戚のような「それなりに親しい人」、その外を「職業上の役割における人間関係」が広がっている。自分から最も近い、家族、恋人、親友は専門的に「重要な他者」〔significant other(s)〕と呼ばれる。家族やパートナーであれば、物理的にも生活空間が同じことがある。これが、相手のことは知っているという思い込みにつながる。本当は、日中は別の場所で勉強や仕事をしているため、共有する時間や体験は実は非常に少ない。にもかかわらず、それを「埋める努力を意識的にしていない」上に、身近な人への甘えが出るため、「家族は本人の悪い部分しか見ることができない」ということにもつながってしまう、と［水島　2011］。

家族にインタビューしたいと計画した学生たちは、対象となる人物に対し、なぜ、という疑問を持っていた。しかし、それは素朴な疑問、というよりは、どうしてそうなの？という、不満に近い（場合によっては明らかな）ものだった。相手は家族である学生に、遠慮なく職場の不満や問題を打ち明ける。しかし、学生はその詳しい背景を知る訳ではないし、働いたこともないので、ある意味白黒をつけるような「なぜ」という疑問を持ちがちである。今回インタビューして初めて、予想もしなかった複雑な背景があることに気づいたようだ。

授業を通じて改めて強く感じたのは、インタビューの仕方や意義を教えるだけではなく、彼らのインタビュー構想のどこが面白いポイントで、どうやって深掘りしたらいいか、というところまで話を聞きだし、それを他の学生も参考にできるようにした方がいい、ということだ。彼らが授業で学ぶ内容も私生活で知り合う人も限りがある。

人類学専攻のため、授業で聞く話は自分の経験から遠い事例が多く、家族や友達の話では何も新しい発見がない、と感じてしまいがちである。しかし、人類学者である教員の側からすると、彼らにとっては「身近な人」が、非常に興味深い経歴の持ち主であったり、捉え方が独特であったり、ということが往々にしてある。

その人やテーマの面白さに気づき、問いを立てられる、と指摘できるのは、実は、私たちには先行研究についての蓄積があり、頭の中でそれらと比較しているからである［鹿島　2003：42－83］。卒業論文の指導の経験を通して、論文の書き方を実践的に論じたフランス文学研究者の鹿島が言うように、「先生とは、答えを教える人ではなく、問いの見つけ方を教える人であるべき」［鹿島　2003：38］というのは、フィールドワークにおいても言えることである。問いを立てるところまで手伝って、アポ取りも聞き取りも自分でどうぞ、と送り出す時は、あたかも崖から突き落とすような後ろめたさを感じる。

しかし、学生たちは、自分で崖を上る力を持っているのである。

Ⅱ　受講生作品

以下、名簿順に紹介する。最初の学生は、経営学専攻の学生、最後の三人は大学院修士課程一年の聴講生である。他は社会人類学専攻の三年生である。

1. アンズの村	池谷万暉
2. 彼女たちは特別か	平井美帆
3. 義務か意欲か（非掲載）	木村緋香里
4. 髭、新宿、ストリップ――個性が埋もれられる場所	榊原英太郎
5. 他宗教のパートナーとの国際結婚	齊藤愛佳
6. 大雨の日に	阪上　葵
7. 性格的に	王　蓉果
8. あいまいさに隠れた義務	渡部　暖
9. 職場での人間関係と働く女性	岩島由季
10.「人間力」に惹かれるファン	髙村真登
11. 400万円の価値	野口香里
12. Xジェンダーの友人の話	田中秀幸
13. 作品とは何か―画家Cの語りから	山岸哲也
14.「めちゃくちゃ計算してるの」	佐々木 裕梨
15. 祖母が語るオカミサン	岩倉知葉

アンズの村

池谷万暉

白いのもあるし、黄色いのもあるし、大きいのもあるし、小さいのもあるし、タネも甘い方もあるし、苦いのもいっぱい、あるんですよ。それでね、朝起きたらみんな（木の上のあまりのアンズの量に）どうしよう、どうしよう！と、あのね、田舎の人はみんな親切なんですよ。家に来てください、家に来てくださいって、私達行って、アンズの木の下に座ったまま、あのねもう若い人みんな15歳、16歳の子供達よ、それでね、食べる～食べる～、一生懸命食べる、美味しいよ、各木のアンズを全部食べた、どっちのアンズが美味しいかなって思いながら、また来年も行こうと思って。

こう語りだした彼女の様子は、それまで話していた数時間とは打って変わって楽しげであり、それはもう可笑しくて仕方がない、というようにこみ上げる笑いで息を切らしながらも話していた。

彼女が生き生きと語るこのエピソードは、実は中国の文化大革命期に毛沢東によってとられた下放政策の下、農村で過ごしていた時期のものである。彼女は青年期の期間を郷里から遠く離れた農村で、肉体労働の働き手として過ごした。

私はこの日、当時の様子を聞きに来ていた。文化大革命という政治的位置付けの難しい話題だっただけに、インタビューの前半では最初は無難な話題から始めようと、日本に来て苦労したことや、中国との違いなどから尋ねていった。一緒に入った中華料理店の窓際の席から見下ろす夜の新宿の交差点を眺めながら、彼女が日本に来た当時の景色はどんなだったろうと思った。記憶を遡りながら、時々考え込みつつ、彼女は思い出すことをよく語ってくれた。二時間もあったはずの食事の時間はあっという間にレストランの閉店時間になってしまった。

「昔、農村部で働いていたことについても聞きたかったんだけど…」

新宿駅の改札に向かいながらやっと店で切り出せなかった下放の時代について尋ねてみた。

「まきちゃんは下放に興味があるんですか。」

彼女は少し意外そうに聞き返したが、思いの外彼女の様子は普通だった。

「う～ん、でも何を話したらいいかなぁ。」

彼女はどこから話せばいいか分からない、といった様子だった。きっとこの時の私の表情はとても深刻そうだったに違いない。改札前のエレベーターを降りたところで彼女は唐突にこういった。

「まきちゃん、アンズを食べたこと、ありますか。」

「うーん、どうだろ、どうして。」

「この前、Xさんと塩水寺に行ったんですよ。」

突然の話に私は面喰った。下放の話はどこへいった。彼女にはもともと話が飛ぶ癖がある。

「そこにね、日本庭園を見に行ったんですよ、帰りにね、アンズの木があって、え、日本には珍しいなと思ったの。」

そしてそのまま彼女はアンズをいくつか拾った。彼女はその時のアンズがとても大きく、おいしそうだったことについ惹かれてしまったと照れた様子で言った。

「それでね、その時、こっそり食べてみたんですよ、そしたらおいしい～の。」

私も彼女も思わず笑ってしまった。それぐらい彼女のおいしいには力がこもっていた。

「知らなかったYさん、アンズが好きなの。」

「だから、その時、田舎のアンズはおいしかったなぁ～って、すっごく思い出したんですよ。急いでね、他の落ちてるアンズも拾ってしまったの、日本にはあんまり、おいしいアンズがないですよ。」

そしてそのまま彼女は冒頭のことばを一息に話し切った。彼女は自分がいた村を「アンズの村」と呼んだ。アンズの話をしている間の彼女の目はキラキラと輝いていた。明らかにさっきまでの様子よりも喋るテンポは速くなっており、楽しくてしょうがない、といった様子だった。手は、アンズを拾ったジェスチャーをして以来、大切そうに両手で何かを抱えた形のままだった。

そのまま話は下放生活の日常の様子になった。しかし、相変わらず彼女はとても楽しそうだった。聞けば、今でも下放時代をともに過ごした学生とはみんな連絡をやり取りし、定期的に会うのだという。

「もしかして、(下放の時が) 一番楽しかった？若い時で。」

「楽しかった。生活はすごい苦しかったけど、精神的には楽しかったよ。」

彼女はこの言葉を力強く言い切った。私はこんなに楽しそうに話す彼女を知っていただろうか、とさえも思った。その後も内側から溢れ出すように出てくる下放時代の話を立ったまま、約30分間聞き続けた。中には食料不足や過酷な労働に悩まされたという話も含まれてはいた。しかし、この日の彼女の語りから立ち現れる映像は若い彼女と彼女の友人たちが苦しいながらもかけがえのないひと時をともに過ごした、という色鮮やかな思い出だった。楽しく話を聞きつつも、私は、彼女にとっての下放生活が、私が当初描いていたものとは全く違うものだった、ということに静かな衝撃を受けていた。そして、どうしてこの様に当事者の語りと大きく異なる認識を私が抱いていたのか、ということを今も考え続けている。

彼女たちは特別か

平井美帆

6月上旬の日曜日、私は駅前で友人を待っていた。午前10時前、人通りが増え始め、ショッピングモールや飲食店が開店し始める時間だ。空には薄く雲がかかり、風があるので過ごしやすく感じる。私は彼女を待つ間、インタビュー内容の確認をして待つことにした。しばらくして、少し離れたところに彼女が立ち止まるのが見えたので声をかけ、近くの喫茶店に入り、向かい合って座る。

彼女と私は同じ洋菓子店でアルバイトとして働いている。普段は結んでいる長い髪をおろして、黒いレースのついたブラウスを着ている。彼女は中学校、高校、大学と都内の女子校や女子大学に通っている。現在大学2年生で、翌週にテストを控えているというが快くインタビューに協力してくれた。彼女が女子大の学生だということを頻繁に話題にする共通の知人がおり、私は彼が感じているであろう、彼女に対する特別感の正体を知りたいと思っていた。私はインタビューのお礼を言って、女子校や女子大について教えてほしいと切り出した。

「なんか、すごい、いじめがやばそうとか言われます。陰湿な感じがって。」でも本当はそんなことなくて、と彼女は中学、高校時代のエピソードを次々と話してくれた。「体育のあととかは、結構もう“異臭事件”みたいな、シーブリーズ（制汗剤）みたいなシューってやるやつとか、みんなやるんで、なんかもう『何このにおい！』みたいな、息できないみたいな、なんかちょっと煙いっていうか、シューとかでもくもくなってて、・・・（中略）・・・あと、カーテン閉めて、男の先生が次の授業だと、（カーテンを）閉めて『あ、まだ着替えてまーす』とか言って、授業30分くらいつぶすとか。」インタビューの記録のためICレコーダーを使っていたが、彼女は気にする様子もなく、普段と同じように明るく楽しそうに話をしてくれる。

私が、女子校、女子大の学生について周囲からもたれるイメージを彼女自身がどう感じているかということを尋ねると、彼女はこう語った。「なんかちょっとなめられそうだなって感じはあります、なんか、こいつみたいな、絶対なんか、誰とも付き合ったことないだろみたいな感じの、なめた感じでかかられてるなって男の人とかだと思いますけど…」このように感じることはあるものの、彼女の周りには女子校出身者が多く、それ自体「別にめずらしくない」という。

しかし、彼女が女子校や女子大の所属であることを知らないはずの人から指摘されることもあるという。「（女子校出身であることが）ばれたときとかに、ちょっと、あーやばい、何？何をなおせばいいんだろうと思います。『もしかして女子大？女子校出身？』って言われたら、（動揺した様子を再現して）んーってなってなにー？何でばれたー？って。」女子校や女子大に所属するということを特別なものとする意識が、彼女たち本人と周囲の両方にあるのだろう。インタビュー中に、私も無意識に共学の

学校を「普通」と形容していた。

彼女が注文したメロンスムージーのグラスから水滴が伝ってコースターに落ちた。私は「溶けちゃうから」と手でグラスを示しながら話題をアルバイトのことに変えた。男性スタッフと一緒に働くことに違和感あるかという質問に彼女は、「それは大丈夫ですね」と淡々と答える。ほかにも電車の中、店員、学校や塾の先生など「なんでもなく他人として接するとき」に違和感はないという。

一方で彼女は、「(男性が) 学びの場にいるのはなんか衝撃で。教習所に通ってた時に、なんかこう、プリントとか回してて、後ろが男の人だと (息をのんで) はーーって、なにー！みたいな、すごいびっくりっていうか」と、時々笑い声も交えながら話した。学びの場に、同じ立場で存在する男性には違和感を覚えるようだ。

インタビューの終盤、彼女は「“におい” みたいなのが、たぶんあるのかなって」と言った。彼女たちはお互いに、話し方、肌の距離、会話の展開の仕方など、さまざまな共通点を感じるという。彼女から「共学の “におい” ってないですか？」と聞かれたが、私には思い当たることがなかった。女子校、女子大の人たちの中に共学の人がいるときも「におい」の違いがあるらしい。彼女は主に会話中に、「におい」の違いを感じることが多いということを話した。「高校だけ女子 (校) だと、あんまり “におわない” ですけど、中高一貫で女子 (校) だとわかります。」女子校や女子大に所属するということは、学校が違っていてもお互いに仲間と思うようになるという。「マイノリティー感っていうか、『いっしょー！』みたいな感じで。」ちょうど、同じ出身地の人に出会うと嬉しいというのに似た気持ちだと例えてくれた。この例えは私を大いに納得させた。

インタビューを終えると昼前になっていた。喫茶店の外は、冷房の効いた店内にいたせいで朝よりも暑く感じる。女子校や女子大について指摘する人がいて、彼女たちも仲間意識を持っている。しかし同時に、彼女は女子校出身者を「別にめずらしくない」と言い、私も彼女に対して「女子大」という点で特別さを感じることはないのだ。

髭、新宿、ストリップ ――― 個性が埋もれられる場所

榊原英太郎

2017年6月14日午前11時30分。男子大学生Aさんと私はインタビューに適した場所を求めて大学の生協広場に行き着いた。天気は晴れ。時折涼しい風が吹く。黒い長髪が肩にかかり、落ち着いた暗めの色の服装をしたAさんは時々昼食用のおにぎりを口に運びながらインタビューに答えてくれた。

Aさんは何年間か引きこもりの生活を送っていた。その間に特に意識していたわけではないものの髭が伸びてしまい、それがAさんが興味をもつ近代以前のロシアの「権

威者」たちの外見的特徴、つまり権威の象徴としての髭とリンクしてきたため、「もったいない」ので今も髭を剃っていないのだという。今回のインタビューは、そのようなAさんの外見上のアクセントとなっている10cmほどの長い髭についての質問から始まる。

「もったいない、という理由だけで伸ばしてるんですか？」

「……まぁ剃らなきゃいけないっていう理由も見当たらない。髭禁止令が出ているわけでもないし…。」彼は間を開けながら慎重に答える。目はあまり合わず、どこか遠くを見つめているかのようである。

「それもそうですが…、でも剃った方が、全体に溶け込めるというか…‘普通’じゃないですか？」

「なるほど。…それはやっぱり、‘普通’である、‘溶け込んでいる’ということに、価値を置いていないからでしょうね。なにかに溶け込むためにがんばったことは一度もないです。‘溶け込む’ね…、そんなに溶け込みたいか？って感じ。」

それならば、彼は髭を使って目立つことを第一の目的としているのだろうか。

「特別ファッションとかに興味があるわけでもないんですよね。溶け込もうともしてないけど…目立とうともしてない。…目立たないでほしい。」Aさんは自己を分析するようにして時折目を閉じながら言葉を発する。

「いや、でも結果的に目立っちゃってるじゃないですか。」私は笑いながらつっこむ。

「結果的にそう見られてるかもしれないですけど、でも、これをやって…、目立たないっていう社会が理想ですね。」

突飛な答えに二人とも笑う。

ここでAさんは肩掛けカバンから強烈なピンク色のエッセイ集を取り出す。Aさんはその中の「新宿」という部分が好きなのだという。彼はその部分を音読しつつ語ってくれた。

「新宿にしか行かなかった。あとは高円寺くらい。渋谷を歩くのがすごく嫌で。坂が多いしこういう服を着なくちゃいけないなんてのがある気がして。こうだといけない、こうしないといけないとかそういうものが新宿にはなかった。渋谷を歩く才能がなかったから、新宿を歩くのが好きだ」っていう歌詞なんですよ。これは…なんか、新宿っていいなって思っちゃうんですよ。個性っていうか…いわゆる‘個性’を発揮してても、それで埋もれられる。

Aさんは、新宿でとても奇抜な格好をした人が周囲の人々に全く気にも止められず歩いているのを目にした時、新宿という場所に「救い」を感じたという。

そして次第にAさんがよく行っていたストリップ劇場の話へ移る。Aさんは初めてそこで劇を見た時、涙を流して感動したという。また、ツイッターなどでよくストリ

ップ劇について呟くのだそうだ。そのため私はそれまでのストリップというものへのイメージとの差に衝撃を受け、SNSでそういったことを発信するのに恥ずかしさを感じないのかと尋ねた。

「まったくないですね。…素晴らしい、と。みんな見てくれー！って。」

あまりの迷いのなさに二人とも笑ってしまう。

「あんまり女性の裸を見るっていうことを、やましい事だと思ってないということでしょうか」

「そうですね…性的に興奮してたら涙出ないですもんね。」

果たして、彼のこのストリップを観に行くという個性は、周囲に埋もれることができているのだろうか。そこで、先ほどのエッセイについてAさんが共感するのはどういうところなのか再び聞いてみた。

「埋もれられない人が、でも埋もれているっていう…救いですよね。型にはまれてない人、というか、ダサい人っていうのが、雑多に、埋もれられてる。そういう場所だと思います、新宿は。」

「だから、Aさんも新宿が好きなんですか？」

「はい、埋もれてるっていうことにやっぱり救いを感じますね。」

埋もれたいのなら、周囲と同じことをしているのではダメなのだろうか。髭を剃ってはダメなのか。ストリップ劇場のことを隠していてはいけないのか。

「でもそれで埋もれてたらなんか意味ないじゃないですか。それは同じ埋もれるでも意味合いが違いますよ。これ埋もれるだろうなっていうのが埋もれている、というのは。」

私たちは誰もが、自分の個性を発揮したいという欲望と周囲に埋もれて安心したいという欲望との間で葛藤しながら生きているのではないだろうか。Aさんはインタビュー全体を通して時間をかけて慎重に回答していたが、最後の質問には力強く即答した。

他宗教のパートナーとの国際結婚

齊藤愛佳

19時18分、初めて降り立った駅のロータリーでKさんと合流した。彼は34歳の社会人で、仕事の研修で彼が指導した2歳年下のインドネシア人でイスラム教徒の女性と、2年の交際を経て2年前に結婚した。車で移動し、チェーン店の某喫茶店に到着する。たわいもない話を終え、他宗教のパートナーとの国際結婚とはどのようなものであるのか、聞き取り調査を開始する。

Kさんと相手との交際期間は2年だが、実際に会ったのは3、4日で、普段はスカイ

プで連絡を取り合っていた。「逆にそれが面倒くさくなったってのもあるけど結婚(した)」と彼は言った。彼はインタビューに対して一定の落ち着いたトーンで淡々と答える。彼の国際結婚に対して父親は、「好きにしなっていうタイプで、まあその代わり責任は自分で取れよっていう人だから」さほど反対しなかったという。一方で「母親は、結婚すると宗教変えなきゃいけないっていうのとー、それでちょっとまあ。初め母親は反対してたよ」と話す。

Kさんは、インドネシアで挙式したが、彼はイスラム教徒ではないため、その前にイスラム教への改宗の儀式をする必要があった。Kさんは「(結婚に至るまでの)手続きが面倒くさかった」と話す。「向こう(インドネシアで)の結婚っていうのは、市役所に『ハイ、紙出しましたー』じゃないから」、つまりそれについて「こんくらいの(A4くらい)、文章の書いた紙渡されて…(中略)…天使の名前を言わされたんだよね。最後になんかアラーがどうのこうのって」と語る。改宗が完了した後、貴方はイスラム教徒ですよっていう書類」に「これからじゃあ結婚しますよ」という趣旨を記入し、イスラム教徒の役所(インドネシアは市町村単位の役所は無く、宗教ごとに分かれている)に結婚証明書を提出する。そのまま警察署に行って「自分は何も悪いことしてませんよって。調べられて、国際結婚だから(といって)スパイじゃないよねっていう」という確かに面倒な過程を経て結婚式に至るそうだ。「お国柄だなあ、全然違うんだなあと思ったよー」とKさんは穏やかに語る。さらに結婚式も日本とは異なり、招待状は出すが出欠席は取らず、「トータルすれば1000人くらい来る…(中略)…物珍しさで(近所の人が)どんどん来る」と話しながら、当時の写真をKさんは自身のFacebookから探す。写真にはきらびやかで派手なインドネシアの衣装を着たKさんと奥様が写っており、「この頃(5回目くらいのお色直し)になってくると目が死んでる、笑顔がないよね」とKさんは言う。素敵な微笑みを浮かべる奥様と比較すると、写真のKさんは疲れた顔をしている。

Kさんは改宗し、建前上豚肉を食べることと飲酒は禁止されているが、会社でやむを得ないこともあるため、奥様には「100パーセントはできませんよ」と断わっているそうだ。しかし結婚初期の頃は、飲酒して帰って来たり、イスラム教では不浄とされている左手で食べ物を取ったりした時などの規範を破った時に「相当きつく」言われたようだ。その様子は「まず舌打ちが飛んできて、で…なんだろう、怒り出すとこうなる(手をまっすぐに突き出す。恐らく周りが見えなくなる、リミッターが外れるの意)人だから、『ワーッ(息が多めでハーッに近い)』て言われて、フッてどっか行っちゃう。基本的に誰も知らない海外に来ようってほど気は強いからね」と説明してくれる。Kさんは奥様に、難解な日本語を噛み砕いて小学生の子供に言い聞かせるようにすることがあり、「奥さんであり娘でもありみたいな」感覚になるという。しかし徐々に宗教が原因の喧嘩は減ってきたとKさんは話す。最近した喧嘩は、Kさんが休みの日に家事をしなかったことを怒られたということであり、奥様は宗教の違いにお

いて寛容になりつつあるようだ。

規範に関してKさんから「豚肉（を食べないこと）は絶対耐えらんないんだろうなあと思ってたけど、意外と平気。なかったらないで…（中略）…結婚したての時は（社食を）自分で選べた時に全部（強調）豚肉にしてたりはしたけど」と聞き、思わず笑う。「普段食べてたものが食べれなくなるから食べたくなっちゃったんだろう」と理由づけていた。

この他にもイスラム教には、日中の飲食を断つラマダーンと呼ばれる約1ヶ月の期間があるが、Kさんは断食を行わない。「その1か月相当やだよ。あー来たなって」と語る。しかし夜7時以降は一緒に食事をし、奥様が再び食事をとる午前2時頃、Kさんは起こされ、「寝てていいから…（中略）…一緒にいろみたいな。それはもう向こうがただ単にひとりでいたくないだけなんだろうけど」というように、限られた時間で食を通じたコミュニケーションは図っているようだ。また、その期間中Kさん自身は朝食を食べるが、「嫁の前では食べない」という配慮をしているそうだ。奥様の可愛らしい一面とKさんの優しさに、宗教を超えた夫婦の温かさを感じる。

インタビュー終了後、奥様の親睦会で、奥様が「一番美味しかったのはマンゴーサワー」と話し、一緒にスーパーに行くと「ほろよい（チューハイ）」を指差して「あれ美味しかったんだよねぇ」と呟くといったエピソードを笑顔で話すKさんを見て、微笑ましい気持ちになった。

大雨の日に

阪上　葵

その日は彼女と駅で待ち合わせていた。「お待たせ～！」と駆け寄ってきた彼女は前回会った時よりも髪が短くなっている気がした。久しぶりに会う友人に、この日はインタビューを申し込んでいる。こちらは少し緊張しつつ大丈夫だよ、おはようと返したが、彼女の方はいつもと別段変わらぬ調子だった。インタビューに快く応じてくれた友人は、同じドイツ語の授業を受けていた大学1年生の時からの縁である。妙に気が合って、二年生でも週二回のペースで一緒に昼食を食べ、それがなくなった今でも仲が続いている数少ない友人の一人だった。彼女は自分と似ているように思うがどこか違う。独特だと感じる。そんな居心地の良い友人のルーツを知りたくて、このようなインタビューをお願いするに至った。大雨のその日、雫混じりの強風にわあわあ騒ぎながら着いたお店は、駅から少し歩く、ランチが美味しいカフェ。カウンターに案内され席に落ち着くと、ゆるりと会話が始められた。

「いまは、ゼミの準備とか課題が重くて、面白いんだけど、結構本読まないといけなくて。」近況について訊ねるとそう話し出した。歴史考古学を専攻している彼女の

専門は、その中でも江戸時代後期だという。大変そうな様子で話していたが、彼女は一人で鎌倉に出かけるほどの寺社好きである。それが今の進路選択にも繋がっているのかと思い、いつから寺社仏閣や日本の文化に興味を持つようになったのか訊ねた。

地元にいたとき、学業成就とか、交通安全の祈祷やってたのよ、お寺で。でそれを、ちょうど私が合格祈願のために行った時に、お札もらうじゃん、それを、願いが叶ったらお寺に返す、その風習があって、その時に家離れるし、と思って（中略）ご朱印帳欲しかったし、その時はノリで、だったかな。

茨城の出身である彼女は現在実家を出て大学近くで一人暮らしをしている。玄米コーヒーを一口飲み、また話は続く。「前々から行くのは好きだったけどご朱印帳集め始めたのはでも高校三年生ぐらい。（中略）行った証が欲しいみたいな感じ。でもやっぱり大学から本格的になったかな、うん、高校まではそんな行く頻度も高くなかったし。」そう少し早口で話す口調はどこかぶっきらぼうに聞こえるが、そこが彼女らしいといえば彼女らしい。「神社の雰囲気が好きだからね」と話す彼女とは、一度鎌倉に遊びに行ったことがある。その際に訪れた報国寺の竹林を思い出した。その話をすると相好を崩した。あの独特の雰囲気。静けさ。匂い。それが好きなのだという。

「すぐハマるんだけどすぐ飽きちゃうんだよねー、熱しやすく冷めやすい。そこが短所」「お、自己分析？」「そ、自己分析（笑）ほんと勘弁（笑）」しかし彼女の歴史文化に対する興味は未だ続いていて、学生としての研究対象として選ぶまでになっている。そこを指摘すると、そうそう、と頷いた。「これだけはね。これは嫌いにならないって言うか、飽きないね。」

「こんだけ種類があるとね。広いし。幅広い。今は仏像に興味持ってて。こないだめっちゃ分厚い本買った！」言いつつカバンから言葉通り分厚い本を取り出す。ここでお店のウェイトレスがお皿を下げに来た。ありがとうございまーす、と一言挟んでから、彼女は話を続けた。

「いっぱい種類あるし、一つ一つに意味があって、薬師如来像とか半跏思惟像とか…こうやってるやつ。」彼女が有名な像の真似をしてみせる。静かなお昼のお店に私たちの笑い声が混ざっていく。自分の研究分野について話す彼女はいつも楽しそうだ。興味がずっと続くのっていいね、と告げると、うーん、と彼女は腕を組んだ。

「大学のうちはずっと好きなことやりたいけどさあ、」彼女が外を見やる。雨はまだ風にあおられながら降り続けている。視線が手元に移り、実際仕事に活かせるかって考えると全然活かせないんだよね、と彼女は続けた。大学三年生二人の話は将来のことへと移っていく。「観光の仕事にも興味あって」と話し出した彼女にその訳を訊ねると、すぐにその答えは返ってきた。

「私が中学三年生のときかな、おばあちゃんおじいちゃんと私の三人で、東北の旅

行ったの。山形、福島、岩手、宮城を巡るバスツアー。」それが楽しくて、それからかなあ、と視線を遠くにやった彼女は自らを超がつくおばあちゃん子だ、と言い切った。彼女は祖母とよく旅行に行き、その行き先に山寺などがあることが多かったという。「おばあちゃんの影響って大きかったのかも」と彼女が呟いた。近しい人の影響が大きいのなら、と共働きしている彼女の両親について訊ねると「生け花の先生やってるよ」と。これはその時初めて聞いた話で、私は思わず声をあげた。お花に目覚めたりはしなかったのかと問うと、あっけらかんと首肯した。

コーヒーの氷が溶けていた。場所を移動しようかと立ち上がる。私と彼女の会話は傘を並べて歩きながらも続いていった。

性格的に

王　蓉果

6月半ば、夕方6時ごろにとある人と待ち合わせをしていた。待ち合わせの時間を過ぎていたため私は彼のもとへ急いだ。待ち合わせ場所へ行くと彼はベンチで携帯を弄りながら私を待っていた。「おつかれっす！」私が来たのに気づき、そういった彼は私の所属するサークルの後輩Tである。彼は3年間フリーター生活を送り、この大学に入学した。彼とは以前から飲みに行くような関係であり、フリーター生活のことを少し聞くことはあったが、あまり深く聞いたことがなかったため、改めてインタビューをしようと考えた。私とTは話しながらとある居酒屋まで向かった。居酒屋につくとすぐに奥の席まで案内された。店内は金曜日だからであろうか、とても賑わっており、聞き取りをするのにはあまり適していないような環境だった。私たちは席について早速飲み物を注文した。

「全然何でも、聞かれればポンポン答えるんで。」Tは聞き取り調査に慣れていない私に気を使ってそう言ってくれた。私は改めて彼にフリーターになった過程を聞いてみた。

「まぁ2年フリーター期があって1年が勉強期間があって、バイトしながらっすけど…しかもフリーター期の最初の1年は若干浪人しようかなくらいの気持ちもあって…。」その後、彼は高校3年生の時は普通に大学受験をして、センター試験まで受けたが、国公立の願書の提出日を勘違いしてしまい、結局受験できず、親にも先生にも落ちたと伝えたことを面白話のように話してくれた。

そして浪人期に入り、一年目は大学を受けるつもりでセンターの出願はしていた。勉強しながらも最低限生活費を家に3万円入れなければならず、受験にかかるお金も自分で出さなければいけないため、掛け持ちでバイトを始めた。本格的に勉強をするため、9月にバイトを辞めるつもりだったが、コンビニの夜勤バイトの人が足りなく

てやめられなかった。11月になりやっとバイトを止めることができ、夜勤で崩れた生活リズムをなおしていったと語った。

そして彼は自分の家庭環境について話し始めた。自分の部屋がなく勉強に集中できないこと、父親がご飯やお風呂などのタイミングを強制してくること、父親には大学に行かせる気持ちがないこと。

「年明けぐらいですかね、一月の頭ぐらいにすごい父親ともめて『お前そんな勉強なんてしてねぇだろ』って言われて、もうそれでプツンときてしまって…（中略）…もうしらん。受験は知らん！しない！って、しなきゃいいんでしょって、それでいいんでしょって。もうやけくそっす」。「ほんとはいきたかったの？」と聞くと、「まあいきたいっすよそれはもちろん。いけるんだったらいきたかったっすけど、もう売り言葉に買い言葉で。俺性格的にそうなんすよ。一回折られるとじゃあいいよって、全部投げやりになっちゃって。まぁそれで後悔してばっかなんすけど」。

彼はそこから完全に勉強せず、バイトをまた探し、本格的なフリーター生活をしていった。そのバイト先で彼の大学進学への気持ちを思い起こさせる出会いがあった。

先輩たちで4人くらいの仲いいグループがあって、先輩たちに結構仲良くしてもらってて。その先輩の一人は早稲田受かってうまくいってたんですけど、就活うまくいかなくて就活浪人する羽目になった人と、一度現役で大学はいったけど二浪してほかの大学入った人。そういう先輩とかが、「何でもいいから大学は出とけ」って。「マジで後悔するよ」って言われて。飲んだ時っすけど。その先輩方が一番影響強かったんで。二浪した先輩は「正直言って二浪とか三浪だったら全然大学関係ないし、俺の年上全然いるからお前いったほうがいいよ」って。「お前やればできるタイプだからほんとにいったほうがいい。」そこまで言われちゃったら…じゃあやるしかねぇって。

「でもさ、お父さんに俺やんねーよっていっちゃったじゃん？」と聞くと、「その時はもう一切相談してないっす。もう勝手に勉強はじめて…家で勉強し始めて、参考書も自分で買い集めて…」。そして彼はバイトをしながら受験勉強をし、晴れてこの大学に受かったという。

私は今のTが大学生活で疎外感を感じるかという素朴な疑問をぶつけてみると、「あー、ありますよ。まああんまり気にしないっすけど。気にしてたらきりがないんで。気にしてたら大学なんて入れないっすよ。全然世代違うんすもん。一緒の学年ってなるとちょっと最初壁ありましたもん。でもいくつって聞かれたら答えるし、あと浪人？って話されたら浪人だよって。だから自分から言うことはないけど聞かれれば別に正直答えてた。嘘つく必要ねーやって」。と彼は平然と答えた。

私は彼のことを苦労人だと思っていたが、そのようには見えず、むしろエンターテ

イナーであると感じた。というのも、彼は一貫してこれらの話をつらい経験としてではなく、笑い話として話していたからだ。

あいまいさに隠れた義務

渡部　暖

6月8日。半袖が心地よい陽気の中、私は駅前にあるクロワッサンで有名なカフェに来ていた。平日ということもあり、店内は人もまばらだ。目の前にはよく見慣れた人が座っている。自転車部の先輩であるさやかさん（仮名）だ。珍しく少し緊張気味に見える。

さやかさんは去年女子ツーリング班の主将を務めた人だった。ツーリング班は女子班と男子班の二つに分かれているが、夏合宿以外の行事は全て男女関係なく行動を共にする。それぞれの班に主将・主務（合宿のルート決めや宿の手配などを担当）・会計などの役職があり、3年生になると1人1つ以上の役職を担当する。その中で女子班主将はとてもあいまいな存在だ。なぜなら部活全体の統括は男子班主将が行い、女子班のみで行う夏合宿でも女子班主務などほかの役職が合宿に必要な仕事のほとんどをやってくれる。これに対して女子班主将は他の役職のようにやらなければならない仕事が明確に定まっていない。強いて言うならば夏合宿の班決めくらいである。女子班主将の仕事って何なんだろう。そう考えた時に、さやかさんは主将の仕事をどう考えていたのか気になり、インタビューをお願いした。

まず、主将をやろうと思ったきっかけについて尋ねた。この部では幹部交代する前に自分たちでどの役職に就くか決める。さやかさんはどうして主将を選んだのか。

（同期の女子が自分を含めて3人いる中で）自分は（主将・主務・会計のうち）何だろうと思って、私たぶん3人じゃなかったら、何もやりたくないなって思ったと思う。…（中略）…もっと（同期の女子が）たくさんいて、リーダーシップ取れそうな人いたら絶対やらないと思う。めっちゃしゃべって（女子班を引っ張ってくれるような人がいたらやらない。）…でもいないし、（女子班）主将をこの（3人の）中で（誰かが）やるんだーって思ったら、私が一番主将とか（向いていそうだし）、何か周りから当たられたりとか、なんかよくないことが起きた時も一番はっきり言えそうだなって思って。

そう話す一方で、こうも言っていた。「こういう風に部活をしたいから主将がやりたいって言える人の方が、これから長くやってく時も、楽じゃない？…（中略）…しょうがないから、押し付けられたからやるって思うより、自分でやるって言ったほう

が、周りも自分も楽かな。」自分が一年生の時は運動が苦手でつらいと思うことが多かったが、先輩や同期に助けられてここまで続けることができた。今度は自分が主将として、後輩も同じようにサポートしてもらえるような環境を作りたい。そんな思いがあってさやかさんは主将を志願したのだという。周りと自分を比較した上での消極的な理由と「部活をこうしたい」という積極的な理由。私はさやかさんの主将になる動機が2つの面を持ち合わせていたことが意外だった。

「やる人がいないから自分がやる」という動機はさやかさんが部員に対して怒る時にもみられた。私は男子班主将が寝坊して遅刻した時に、さやかさんが彼を怒って涙目にさせたという話を思い出して聞いてみた。「あれはどういう流れでそうなったんですか？」「どういう…やる人いないし、原田くん（仮名。男子班主務）にお願いしたらやってくれたのかなと思うけど…（中略）…やる流れになった、なんとなくなった。」彼女の言葉からは、男子班主将に対して腹を立てているというよりも、怒らなければという義務感のようなものを感じた。「義務感はある。言わなきゃっていうか一応同じ立場の名まえがついてるし、なんだろう、その…やっぱ言わないっていうか、注意しない人ばっかりだから…私の代ってそんなに強く当たって言う人いないじゃん。でも不満はある。言わないけど皆絶対あるはずなのね。だからはっきり言わないとと思って。」男子班主将は「なにもしない」、主将の仕事も他の仕事もあまりやらない人だったそうだ。さやかさんはそのことに対する周囲の静かな不満をくみ取り、それを代表する形で相手に伝えることで、その不満を解消しているように思える。「怒るときに周りの意見は気にしますか？」「周りの意見も聞かないとダメだろうなって思う。周りのどの意見を取るかっていうのもある。いろいろあるから。」一方で一度どの意見を取るか決めた後は「もうこれ選んだからって言って有無を言わせない感じ。こっちにしたからって。」そう言って笑った。

女子班主将という役割のあいまいさ。それはツーリング班に男子班主将と女子班主将の二人の主将が存在するために生まれるものであり、逆手に取れば女子班主将はそのあいまいさゆえに自由に動くことができる。しかし完全に自由だというわけではない。現にさやかさん自身「主将」という名前に対する義務感から男子班主将を叱っている。このように女子班主将の仕事や義務は表面化しないだけでいくつも存在するのではないか。そしてそれにいかに気づいて実行するかがこの仕事の一番の難しさではないだろうか。

職場での人間関係と働く女性

岩島由季

6月4日日曜日、晴れ。外のうだるような暑さとは無縁の、冷房の効いたYさん宅

のリビングでインタビューを行った。彼女は午前中に家じゅうの掃除を終え、アイスを食べながらグレーのソファーでテレビを見ながらくつろいでいた。時刻は午後2時ごろ、日光がカーテンに遮られ少し薄暗い。インタビューすると声をかけると、眠そうに「いいよ」と答えた。彼女は都心にある保険会社で仕事をしている。仕事の内容は事故を起こした人の話を聞き、「保険金をおろす」かどうか審査するというものらしい。

彼女はよく私に、仕事―ほとんど職場の人間について―の愚痴をこぼす。また、最後には必ず「辞めたい」「会社行きたくない」という言葉がついてくる。しかし彼女は現在も辞めずに、休むこともほとんどない。

私は彼女に対して「なぜ会社が嫌なのに辞めないのか？」「なぜ職場の人達が嫌いになったのか」という疑問を感じていたが、このインタビューでそれらのことについて聞いてみた。

「職場で嫌いな人ってどんな人？」と尋ねると、あまり悩む様子もなく「部下の女の子（Aさん）かな」と答えた。どのようなところが嫌いなのか尋ねた。彼女は目を伏せ、低い声音でため息交じりに答えた。「興味ないところにはぜんぜん、やんないから。その部分で仕事はできない。自分中心にしかものを考えないから、全体の流れじゃなくて自分の流れでしか仕事ができない。あと残業好きだね。」Aさんの最初の印象について尋ねると10秒ほど目をつむり沈黙した。「なんか人にズンズンズンズン入り込んでくる。遠慮がない感じ。」コミュ力の高い今どきの若い人だろうか？たしかに50代半ばの彼女なら若い人のテンションについていけないかもしれない、と予想したので聞いてみると「全然違う。40代のおばさん。」と答えた。予想が外れ驚きつつも、「ズンズン」という表現が気になり、どのように遠慮がないのか尋ねた。「うーん…自分のやりたいことしかやっていない、自分が受け入れられて当たり前、自分が受け入れられないことに恐怖を感じていないね。相手は困っているけれど『そんなことないよね』ってスタンス。」“自分がやりたいことしかやっていない”という表現は彼女がAさんの現在の嫌いなところを説明するのに使った表現でもある。現在の嫌悪感は最初の印象ですでにあったらしい。その後も似たような表現を繰り返したので「何か対策してる？距離を置くとか…」と尋ねると、それまでのゆったりとした空気と打って変わって諭すような口調で答えた。

「仕事で距離は置けないでしょ？」

彼女はよく愚痴を感情的に話していたので、職場でもそうなのかと考えていたが、実際は自分の感情を仕事に持ち込まないようにしているのである。対処としてあげたのは仕事以外の話はせず、用件のみ伝えるということであった。

次に上司の男性（Bさん）について話してくれた。同様に、彼について嫌いなところを尋ねると、「むかつかない。完ぺきではないけれど仕事はちゃんとやるから…」とAさんの時よりやや穏やかに答えた。やはり仕事ができる／できないが要因として大

きいらしい。最初の印象について尋ねると、好青年・若い印象で年下であると答えた。私は上司が年下という事実に驚いたが、彼女はそれについて当然というように、昇進のうえでの男尊女卑は残っており、男性の中でしか年功序列がはたらかないということを説明してくれた。説明の中、彼女は自身の扱いについて憤る様子はなく、仕方のないこととしていた。彼の欠点としてあげられたのはプライドの高さであった。「前の部門について詳しいのは当たり前。それに結び付けて僕はこんなに知ってるんだよってアピールしてくる。上位に立とうとする。」

これらのような愚痴を同僚に話さないのか尋ねてみた。男性は大体残っているが、女性はバブル期の入社だったため多くが辞めていった、という答えが返ってきた。仕事が辛いうえに、周りの女性が退職していったにもかかわらず、なぜ彼女は仕事を辞めなかったのか。自身の能力を鑑み、(別の会社で) ステップアップ (昇進) できる自信がなかったことと、少なくとも給料と残業代は確保されることを理由としてあげた。専業主婦になりたくはないかと尋ねると「経済的に非常に苦しくなるとは思うけど、なれないとは思わなかった。でも経済の方とったね。」

働く中で楽しいことはあるかと尋ねると、長い沈黙 (20秒ほど目をつむって) のあとに絞り出すように「とりあえず土日休める」と返ってきた。

以上のインタビューを通して自身の予想と現実とのギャップに気づかされた。Yさんが職場の人々を嫌いになるのは生理的要因が大きいと予想したが、実際は彼らの仕事における技量の問題であった。また、現代の職場では差別的な扱いはないと予想したが、実際は、男尊女卑は根深く残り続けているということである。

「人間力」に惹かれるファン

高村真登

「miwaのことならわいにまかしとき」

こう言いながら少し照れ臭そうに笑うのは友人であるRだ。彼とは大学入学後、地元が同じ静岡東部で非常に近かったこともありすぐに親しくなり、今も頻繁に遊びに出かける。性格は一言でいえば「まっすぐ」であろう。以前共通の友人と彼の話をしたときに、「どうしたらあんなに素直にきれいな心の持ち主に育つのだろう」と真剣に話し合ったことがある、むろん答えは出なかったのだが。それでいて「バカ真面目」ではなく、むしろユーモアたっぷりで我々の間ではツッコミ担当をしている。なにより熱いバイタリティーを秘めた男なのだ。そんな男はもう一つ、20代後半の女性シンガーソングライターであるmiwaの中学生以来の大ファンという独特な一面を持ち合わせている。私自身は特定の有名人に長い間惹かれ続けた経験がない。彼と自分の性格の違い、また似ているところ、それぞれの大部分を理解している上で、なぜ彼女

なのか非常に興味を持った。我々は梅雨の合間をぬった快晴の午後、目的地である大学キャンパス内の共有スペースに向かった。

「miwaはこう、なんていうんだろう、周りに媚びてないんだよね。」席につき、早速一番気になっていた、「なぜmiwaなのか」を尋ねた。すると少し考え込んだのちに言葉を選ぶようにゆっくりとそう答えた。彼の搾り出した言葉が少しピンと来ず眉間にしわを寄せると、察してくれたのか再度説明を始めた。「媚びてないっていうのは自分が歌にしたいって思ったことを歌詞にしてるっていう意味ね。」彼女は高校時代から歌手として成功するためライブハウスでの売り込みやバイトに明け暮れた。その一方で歌手活動を理由に勉強をあきらめることはせず文武両道を実行したという。その結果歌手として成功することと慶応義塾大学に合格することの両方を成し遂げた。「努力」そして「成就」に長けている。「じゃあ彼女の過去とか歌詞に共感できるってこと？」と私が尋ねると、「僕自身中高って厳しい部活に入ってたし、勉強も頑張ってたから歌詞が一言ひとこと刺さってきたかな。」自身の過去を振り返っているのだろう、かみしめるように答えた。「miwaは努力で夢を目標に、そして目標を現実に変えられるんだよ。」それらの経験を歌詞にしてるからこそ強い共感を得られるのだろうと締めくくった。

ここで自動販売機に飲み物を買いにいく。冷房がついていないので暑さで二人ともものどが乾ききっていた。彼は一気に飲み干しまた本題に戻る。「miwaってファン層がめちゃくちゃ広いさ。」久々に聞きなれた伊豆弁でそういった。コンサートには若いカップルもいれば、子供と一緒に家族で来る親世代も目立つという。「それが媚びてないってところにつながると思うさ。」彼の説明によると、アイドルのように特定のターゲットを狙った戦略で売り出せば、その層に特化して受け入れられることはできるという。しかし彼女は自分の経験から自分の作りたい、そして伝えたい音楽を届けることに全力を注いでいる。彼は今まで以上に熱を込めて語った。「だからさ、自然とmiwaという人を好きな人が集まってると思うんだよね。」彼の言う共感とは彼女の生き様に対する憧れに近いのかもしれない。「俺まで好きになるかも」と答えると、そう言われるのが一番うれしいと今日一番の笑顔で笑った。

「まだ言っておきたいことある？」と最後に聞くと、少し考えた後で何かを思い出したようだ。彼はmiwaのコンサートにしか行ったことがないが、彼女のファンでありながら様々なアーテイストのコンサートに行っている友人がいるという。「『やっぱりmiwaのファンが断トツで一番温かい』って」と彼は言った。「温かい」って何だろう？「ん～、簡単に言うと家族みたいな雰囲気かな、家族って温かいじゃん。」彼女のファンの人々は彼女の生き様への憧れ、歌詞への共感そして感謝という子が親に持つのに似た感情を持ち、さらにファンとしてこれからも頑張ってほしいという親が子に持つのに似た感情の両方を持っている。そのことに気づき、彼の「家族」という例えがストンと腹に落ちる。

「音楽から入って好きになるって人が多いと思うけど、人間…だね。」一番印象に残った言葉だ。芸能人に限らず人を好きになることにおいて「性格」や「見た目」が重視されることは多い。しかしその人を長く好きでいるためには彼、彼女の「生き様」に共感し、尊敬できることこそが重要なのかもしれない。

400万円の価値

野口香里

2017年6月上旬の23時、リビングの食卓の向かいにはインタビューの対象者である姉、遥（社会人2年目）が座っている。両親はすでに寝室で寝ているため、部屋には姉と私の2人だ。今日は仕事が休みだった姉に、さっそく事前に伝えてあった質問を投げかけた。姉は、高校生の頃に大きなミュージカルに出演し、大学では演技の勉強をしながら女優を目指していた。そんな姉が、なぜ結婚式のプランナーという職についたのか、という質問である。

彼女はうーん、と悩みながら、プランナーを選んだ主な理由は2つあり、人のビックイベントに関わることと、肩書を得ることだとまとめた。

そもそも彼女が女優になりたかったのは、純粋に演技を楽しみ、様々な人生を体験することに魅力を感じていたのはもちろん、人の人生に影響を与え、憧れられる人間になりたかったからだ、と少し照れくさそうに話してくれた。そんな彼女にとってプランナーは、「その人にとって結婚式ってすごいおっきいものじゃん」といい、人のビックイベントに関わり、影響を与えることは、彼女の中で女優という仕事とリンクしているのだと言った。

また、彼女は「なんか、その仕事を題材にドラマができるような、仕事じゃなきゃ嫌だった」とも言った。自分が物語の主役として働ける、それが彼女にとっての肩書である。

それから彼女は、結婚式とミュージカルは同じだと思う、とゆっくりと話し始めた。

一回も同じ公演ってないわけじゃん。同じセリフなのにさ、すごい爆笑する回とさ、全然反応のない回とあるわけじゃん。でさ、お客さんの反応によってさ、ちょっとセリフアドリブ入れてみようかなとかさ、あるわけじゃん。で、そのアドリブによってお客さんの反応があるじゃん。それって結婚式も一緒じゃん。

私が、「うーん、よくわかんないけど結婚式には新郎新婦の主役しかいなくない？」と返すと、彼女は続けた。「…友人スピーチがありました、もちろんだいたい言うことは決まってるよ。決めてきてると思うよ。けどさ、その言葉によってさ、新婦さん

がさ、涙を流したらさ、友人も涙を流すかもしれないじゃん。プラスアルファ何か別のことを発するかもしれないじゃん、そのあとハグするかもしれないじゃん、それは台本にはないことじゃん。…（中略）…そういうのがあるから、また違う何かが生まれるわけじゃんね。似てない？」だからこそ、決まった進行に別の要素を付け足す存在として、結婚式に列席するお客様は、両親や友人などを含め、みんなが観客であると同時に出演者の一部なのだという。

そしてさらに続ける。

でさ、スタッフっていうのはさ、その二人をさ、いかに輝かせるかってこと、キャストを主役をいかに良く見せるかってことに注力をするわけじゃん。照明の当て方もそう、曲の流し方もそう、それって結婚式のスタッフも一緒じゃん。すごくない？そう考えると。まったく一緒じゃない？結婚式なんてある程度進行ほとんど決まってるっちゃ決まってるよね。…（中略）…でもさ、舞台だってそうだよ、ストーリーは全部決まってるし結末は全部決まってるんだけど、そのなかのさ、感じ方とかさ、反応とかさ、人によって全部違うじゃん、見る人によって違うじゃん。演じてる人はみんな一緒なんだよ。で、お稽古通りに当日を向かえるんだよ、だけど受け取る側によって全然感じ方だって違うじゃん。同じだよね。

あらかじめ決められた進行が人の反応によって変化する、ということが似ているのだという彼女の考えに、私はうーんと頷き、なんとなく理解した表情を見せた。

すると彼女は、おもむろに1年間プランナーとして働いてみて思うことは、「2人だけの結婚式だったら400万円の価値はないよね」と言った。それから400万円の価値について、熱く語ってくれた。

観客が感情移入をするからこそ、意味があるわけじゃん。結婚式もさ、その2人に感情移入をするとか、その両親の気持ちになるとか、だから意味があると思うんだよ。…（中略）…自分に置き換えて考えると思うんだよ、ふつう。ふつうが何かわかんないけど、遥だったら、ああきっと、この人こんなふうに思ったんだろうなとかさ、だからこそこういう（新婦の）手紙になったんだろうな、でそれを聞いてるお母さんってこんな気持ちなんだろうな、じゃあ自分ってどうなんだろうって思うと思うんだよ。そう思ってもらうことに400万円の価値があると思ってる。…（中略）…ゲストがそういうのを見て、なんか、結婚っていいなとか、ああ、パパとママにちゃんと伝えないとな、とか。なんかそういうのをさ、感じられる機会なんだろうなって思う。

ふーんと納得したような表情を見せると、そろそろ明日の仕事に備えて寝かせてくれという要望を受けたため、今回のインタビューはここでお開きとなった。一見、関係ないと思えるふたつのものが姉のなかでは深く繋がっていることに、女優を目指し諦めた姉の、今の仕事に対する情熱を垣間見た気がする。

Xジェンダーの友人の話

田中秀幸

用語

F：female（女）

M：male（男）

Ft○：F to（something）。身体的特徴は先天的には女性。例えば身体的に女性で精神的には男性であるトランスジェンダーの人はFtMという

6月の上旬。梅雨入りの報道がなされて数日が経ってもろくに雨が降った記憶がない。インタビュー当日も雨が降るのか降らないのかはっきりせず、やはり梅雨は嫌いだなと改めて思う。

Xジェンダーの友人である「くら」（ニックネーム、使用に関しては本人の承諾を得ている）にインタビュー協力をお願いすると、くらはその日首都大のダイバーシティ推進室が行っている「多様性についてのレクチャー」において簡単な講義をする用事があり、その後だったら大丈夫だと言った。合流するための場所に行くと、黒いショートボブに髪を切りそろえ、目が小さく見えるほど度が強い眼鏡をかけ、ブルーのジーンズに深緑のパーカー、スポーツシューズといった、男性でも女性でも着られるような衣類を身に着けたいつものくらがいた。

14時過ぎファミリーレストランの「ラパウザ」に入り4人がけ席に座る。平日のこの時間帯は利用客も少なく比較的静かである。ウェイターがくらの注文したマルゲリータを持ってくると、それを食べながら静かなレストランの中で普通の会話の時と同じようなボリュームの声で質問に答え始めた。

「自己紹介的には一応FtXです。はい。」

「フィメール・トゥー・エックス？それって最初からXジェンダーじゃダメなの？」

「それな。だからよくわかんないけどFtMみたいなノリでFから発端だけど（今はXジェンダー）みたいな。身体的性別はFだけど、ほかはなんかぐちゃぐちゃですねみたいな感じで使ってますね。」

「t（トゥー）って変わるって意味もあると思うけど？」

「tは（Xジェンダーにとって変わるという意味よりも）戸籍上はFですっていうのを

表すのかなって感じ。（元々Fで）Mだと思ってたけどそこまでじゃないっていう人とか、（Fから）逃げるのおかしくないっていう人が使ってるというふしもあると思うよ。でもMtFみたいにt（トゥー）をちゃんと入れ替わりとして使ってる人もいる。」

くらは体が女性であることに不満はあるが男性的な体に変えたいと思っているわけではない。とはいえスカートの制服を着たり化粧をしたりするというあからさまな“F感”を出すことは嫌いだ。だから高校は私服で登校できる自由な校風の学校にした。またくらは小学校時代から男子が好きになったり、女子が好きになったりパンセクシュアル（全性愛）的な性指向も持つ。よく聞く「LGBT」のように性指向がはっきりしたセクシュアリティとは異なり、色々な要素が絡まり合っていることを受けてくらは自分をXジェンダーに属させている。ちなみにXジェンダーという括りが存在することを知る前においても自分の一般的に「普通ではない」性指向などを、自然と受け入れられたと言う。それでもくらが中学生だったとき、好きな女の子が「○○（好きな男子）が好き」と書いたメモを渡してきたことはわりとショックだった、と笑いながら言う。

「ボク」っていうのは子供的中性感があるから好き。いじけたりするときに子供らしさを出すときに使う。うん。あ、あと昔使いたいのに使えなかったから最近使ってる。恋人の前とかTwitterとか（ボクって言っても気にされない場）でしか使えないけど。「私」は敬語として使う。相手にとって（私を使われることは）抵抗もないしね。自分として違和感あるよ。やっぱFアピール感はあるから。「くら」って自分を呼ぶこともある。性別を表さないから楽っちゃらく。あ、あと内面では「I（アイ）」を使ったりする。（自然と中性的に自分を表せるから）日本語でもそういうのあったらいいのにね。

私はXジェンダーっていうのを選んでるんですよね。（男とか女とか）どっちでもいいから。（性にとらわれないで）服とか学問とかいろんな好みをそのまま自分に当てはめてる。だから性自認も決まってないなー。どっちつかずってかんじ。自分ではそれでいいと思ってる。わざわざ決めなくてもって。でもそれって逃げって言われたりする声があるから、んーって感じ。洗脳されるのに失敗したんでしょうね、きっと。

くらは自分の性自認ははっきりしてない。性自認のしっかりしている私にしてみればその状態で不安じゃないのかと疑問に思うが、くらにとっては「それが当たり前」だという。それがきっとXジェンダーの特徴なのだろう。しかし、そのような立場にいることは男女二極的な異性愛社会においても、さらに性的マイノリティといわれるLGBTからも疎まれるようなもののようである。ほとんどの人はもともと名前のない

存在であったろうに、成長の過程で社会のあり方を受け入れ、そこで生きていくために何かを諦め、何かを選ぶ。私にしても自分が「ゲイになる」ときに捨ててしまったものをくらはそのまま持ち続けているのではないかと思えた。

インタビューを終え、外に出る。曇っていた空は晴れだしていて、日光が体を突き刺す。「晴れは晴れで暑くて嫌だよね」なんていって二人で笑いながらラパウザを後にした。

作品とは何か ―― 画家Cの語りから

山岸哲也

和室から軽快な音楽が聞こえていた。画家であるCは次の作品の構想を練るために歴史資料を漁っており、和室はとても散らかっていた。私が隣のリビングのテーブルに座ると、Cは待っていたとみえて、「始める？」とだけ言い、すぐさまスピーカーを切り、さっと私の前に座った。インタビューされることに対する気恥ずかしさを言いつつも、Cは緊張した様子もなく明るい表情でスラスラと答え始めた。私は画家が自分の作品をどのような存在として考えているのか興味を持っていた。

Cは中学校の時に画家になりたいと思うようになり、2浪したのちに美術系大学に入学した。それ以来、著名な日本画家である指導教授に師事しながら腕を磨いてきた。その後、大学を卒業して「新人画家の登竜門」とされている展覧会に出品して業界にデビューした。現在は自宅で製作をしながら、たびたび展覧会に出品し、個展も開催されるようになった。知名度が上がり始めて注文が来るようになり、過去の作品も売れてきている。

Cは作品のモチーフとして動植物を扱うことが多い。不思議なことに、依頼人や家族などから「見るたびに絵が変わっている」とか、「やっと絵のなかの猫が落ち着いてきた」などと言われることがしばしばあるという。私はCに作品で何を表現したいのか聞いてみた。すると、それまで軽快に話していたCは急に言葉につかえるようになり、作品に自分を投影しているということを、私のメモをチラチラと見ながら答えた。その後もCは慎重に言葉を紡いでいたが、自分の作品を見て「元気になってほしい」と繰り返していた。そして、自分の作品が売れていくことは「嫁に出す」ことだと言った。私はこの言葉が気になり、「『嫁に出す』ってどういうことなの？」とCの顔色をうかがいながら聞いた。Cは愛着がわいているということだと言ったが、この言葉にあまりピンときていないようだった。

Cが言葉につかえることが多くなってきた一方で、私は相槌をうちながら必死でメモを取りつつも、C自身の作品に対する思考が見えてきて内心楽しんでもいた。

「間違いなくその時の自分が描いてるはずなんだけど、描きあがると、生き物を描

いてるせいか、もう『別の生き物』みたいに感じるときもあるけどね」と答えたが、やはりうまく表現できていなかったのだろう。Cは頭をガシガシと掻きながら言いかえた。

だから…その…別のさ、なんていうの…それ自体なんか別のさ、命を持ってるじゃないけどさ。描かれたものだから別に生きちゃいないんだけど…なんか、描かれたものが…なんかそこで生きてるっていうかさ、別の命を持ってるじゃないけどさ、そういうふうにパッと見える、感じるときもあるけどね…。なんだろうね。そこまで聞かれると思わなかった。

私は我ながら意地悪な質問だと思いながらも、「『別の生き物』って言ってたけど、何？」と聞いてみた。Cもそう感じたのかもしれない。うんざりした目で私を見つつ、渋々答えてくれた。

だから…たまにその作品と…しゃべれるような気分になるときはあるよ。…(中略)…だから、そういう意識があると、売れた時も「行ってきな」とかって思ったりするとか…。「もう行くのかお前」とか…考える時はあるけどね。自分の気持ちをその、カラスとか鳥なり、他の動物なりに託して描いたはずのつもりが、なんか…うん…『別の生き物』になってるんだよね。絵っていうあの2次元のなかで、まぁ生きてるっていうとなんかあれだけど…「生きてるから」…みたいなのがあるからさ。だから「これ欲しい」って言われると…「行ってらっしゃい」と。

インタビューを始めてすでに1時間ほど経って、Cは疲れているように見えた。私はこのあたりで終わりだと告げ、録音を止めた。私はCが「別の生き物」として作品を感じていることがはっきりと聞き取れて、非常に満足していた。ところが、Cは改めて考えることが多かったのか、「自分の作品で伝えたいことか…ほんとにさ、何なんだろうね」と話し続けていた。私は話半分で聞いていたが、Cは急に思いついたかのようにまくし立てた。

「あ、『元気になってほしい』って言ったじゃん。私の絵は『ケツバット』なのかもしれない。『ケツバット』…っていうか、まぁ…そんな感じだよ。それも書いといてよ。」Cはこれまでの様子とは打って変わって、すっきりとした表情になっていた。私は画家と作品の関係に注目していたが、Cにとっては、それに加えて「作品を見る人」の存在が大切なのかもしれないとこの言葉から感じた。作品とは誰かに見られるのが前提のものだ。私は当然のことを忘れていた。私はつい「これだからインタビューが終わった後も気を抜けないんだよ」とこぼした。Cは笑いながら「こっちも疲れたよ。仕事に戻る前に気晴らしする」と言い、テレビを点けて映画を見始めた。私は改めて

Cに礼を言い、部屋を後にした。

「めちゃくちゃ計算してるの」

佐々木裕梨

都心の駅から徒歩1分のところにあるワンルームのアパートが、今回インタビューを依頼した作曲家である宮崎さん（仮名）の自宅だ。私が到着した時、彼はソファに座って野球中継を見ているところだった。「ちょっと待ってて。ソファでくつろいでていいから。」そう言うと彼は昼食の準備を始めた。ソファはふかふかで、座ると丁度良い高さに壁かけの大画面テレビがある。何ヵ月もネットで探したというナショナルウィルの冷蔵庫と慣れた様子で料理をする姿を見て、以前、引きこもって家のことをするのが1番好きだと言っていたことを思い出した。部屋の奥にはギターやベース、電子ドラム、キーボード、レコーディング機材などが置かれている。家で作曲の仕事をすることもあるそうだ。10分程して出てきたのは手作りミートソースのパスタで、お店で食べるような濃い味がした。食後に彼が淹れてくれた少し苦めのコーヒーを飲みながら、好みの楽曲についての話をし、その延長で彼のライフヒストリーの語りが始まった。2人共ソファに座っていて、それは本当に自然な流れだった。

彼は中学生の頃から音楽を始め、高校を卒業した後は芸能事務所に所属しながらバンド活動に明け暮れていた。しかしそこでの収入は0に等しく、別の映画音楽の会社にも勤め、作曲の仕事の他にwebデザインやプログラミングの仕事もしていたという。しかし、その会社が潰れてしまった。

> その時に無職になって、そこから8カ月、収入が0だった。…（中略）…どんどん病んでって、それでギリッギリのところで。このまま保険だけ入って死ぬか。それか当時警備員とかもやってたから、警備会社に普通に入って日雇いでお金貰って生活立て直そうかとか色々考えてた中で、まあ死ぬ気があるくらいだったら1回自分が作ったもの全部出してみようと思って。とある人にポートレート、まあ自分の（webデザインの）作品集を見したら、このレベルだったら十分紹介できる会社あるからって言われて、それで○○（会社名）を紹介してもらえた。

当初彼はwebデザイナーとして雇われていた。仕事をする傍ら作曲活動を続け、音楽の仕事に繋げることを狙っていたという。

> 音楽やりたい音楽やりたいって飲み会で言いふらしてたの。あらゆる飲み会に出まくって。どの飲み会でも。後は芸能関係のパーティーとかね。そう。そうやって（音

楽の仕事が欲しいと）言ってたら、じゃあこれやってみる？って言われて、それでチャンスが来たんだよね。1番最初はなんかカラオケ音源を、生っぽく聴かせられるような編集ができないかって言われて、どう考えても無理なの。それだったら俺が全部録るって言って、一からレコーディングさせてくれってね。…（中略）…そしたら（曲の出来がよくて）度肝を抜かれたわけだからね。それから作曲の仕事もできるようになったかな。

以来テレビCMやネット番組の音源を依頼されるようになり、個人でも作曲の依頼を受けるようになった。社内に彼専用のレコーディングスタジオまでできたという。私が彼と知り合ったのは丁度その頃で、当初私は彼が彼自身の音楽のスキルで現在の立場を培っているのだと思っていた。

細かくチャンスはある。気難しい上司とかがいた時に、その人に恩を売るために、どの仕事をどうきっちりすればいいかとか、その仕事に対してどういう風な、相談をすればいいかとか、うん、相談の仕方を考える、まず。けどそれをやることで、ああ頼ってくれてんだって思わせなきゃいけないわけ。向こうに。頼ってるんですよ、俺なんにもわかんないから、困ってるんです助けてくださいっていうのをやっぱり上司に見せとかなきゃいけないし。で、それだけやってても、ただうるさいガキだから、ほんとは締めるとこは締めるんだよ。それを踏まえた上でこれを作りましたっていうのを提出できるようにがんばる。うん。だからまずは顔色を窺い、後輩に徹する。ゴマをする。

この話を聞いて、妙に納得した。彼は人とコミュニケーションを取るのが非常に上手いのだ。私は彼を妙に「人たらし」だと思っていた。

「そう言われると、宮崎さんっていつもさ、本音がわからない気がする」とわたしが漏らすと、「めちゃくちゃ人をみてる。この人どういう人かなとか。どこに弱みがあってどこにどんなプライドを持ってるのか、とか。めちゃくちゃ馬鹿にしてる時だってあるよ。どんなに上の人でも常に下にみようとしてる」と笑いながら応え、空になった私のカップにコーヒーのおかわりを入れてくれた。

作曲においても同じかもしれないな、と思った。いつでも自分の作る曲や、自分の才能やセンスを疑わないように、作曲家としても自分を誰よりも上だと思おうとしているのかもしれない。「いつも菩薩様みたいなのに、ほんとは腹の中真っ黒なんだね」と私が言うと、「いつも相手がほんとは何考えてるのかとか、そういうのばっかり考えてめちゃくちゃ計算してるの。だから、君みたいなのと話すのはすごくやりにくいんだよ。」彼はそう言って苦笑いした。

祖母が語るオカミサン

岩倉知葉

6月半ば、その日の仙台は何ともさわやかだった。頬にすうっと心地よい風が触れる。窓の方に目をやると、道路向いに繁る木々の緑が以前来た時よりもずっと濃くなっていた。少し身体の不自由になった祖母が、介護サービスを受けられるこのアパートに移り住んでから、もう数カ月が過ぎていた。

オカミサン（オガミサン）は死者の言葉を聞き伝えてくれる人である。人が亡くなったとき、葬式の後にオカミサンを家に呼ぶそうだ。祖母はオカミサンに口寄せしてもらったことがあるという。

「おばあちゃんの知ってる範囲内ではね、神さんと同じように扱うからオカミサンって言うんだど思うの」「神様ってこと？」「うん、そもそもオカミサンっていうのは…」祖母はいつもの訛りで語りはじめた。

> 昔目の見えない人、ご飯の食べるお金がなきゃだめだから、まあ何てゆうの、自分の食い扶持のためにそういう所で修行させられてそういう仕事にしたんだと思うの、…（中略）…そしてほら、目が見えないから我々素人、目明きと違ってこの辺（頭を指して）の勘がすごいからっさ、やっぱりその、そういうこと勉強もするし研究もしたりして、そういうことに長けてくるんだね。

そして祖母は祖母の姉が亡くなったときの話をしてくれた。

> ばあちゃん（祖母の母、私の曾祖母に当たる）の亡くなる前に、一番上の姉、A子と言うんだけどこの人30年ぐらい病院にいだのっさ、この人は独身だったんだけど60ぐらいで亡くなったのね、…（中略）…そんでその姉がなくなったときに、母親にどうする？って言ったっけね、「なにも当だるも当だんないも、当だるかどうかの問題でないんだって、死んだ人の功徳だがらって、だからあんだ連れてきてけらいん」て言われて、気仙沼までわざわざ来て、私この人乗せて唐桑まで連れて行って。

当時、気仙沼に有名なオカミサンがいたという。その人を呼ぶために、祖母は実家のある唐桑から気仙沼へ迎えに行ったというわけだ。A子さんは独身で夫も子供もいなかったことから、「お仏さんの側から言えばだよ、何も残すようなことも無がったからっさ、（オカミサンも）何もたいしたこと言ったわけではないのよ」。

それから話は私の曾祖母に及ぶ。曾祖母が亡くなったのは1996年である。この時呼んだオカミサンは唐桑でよく当たると有名な人だった。

オカミサンは玄関からは入らず、外の座敷から戸を開けて入る。「ほんで今から拝むから、始まっからね」、とオカミサンが鐘を鳴らして入ってくると、集まった親戚たちがそれぞれオカミサンに向かって自己紹介をする。その後、「一口なんぼ」といった具合でそれぞれがお金をオカミサンに渡し口寄せしてもらうのである。祖母の記憶では、その当時一口100円だったようだ。

そして祖母もあまり詳しくないようだったが、オカミサンはまず亡くなった人（この場合曾祖母）の前に亡くなった人を呼び起こしてくれるらしい。その場にいた家族や親戚から「んでこの前亡くなったAちゃんのことでやってもらわいん」と言われたため、祖母はオカミサンに「A子っていうのでお願いします」と口寄せを頼んだ。すると意外なことにオカミサンは「いや、ここさ2人立ってんだよ」と言った。

「後でわかったんだけどYって言う人も出てきたんだね、オカミサンさ何見えたか分かんねけどね。」Yという人は祖母の兄に当たるが、祖母の生まれる以前に2歳で亡くなった。祖母には他に6人も兄弟姉妹がおり、親も忙しかったため、家族の会話に出てくることがほとんどなかったYさんが出てきたことは意外だったと言う。

口寄せがよく当たるので、なかには「オカミサンがあんなごと分かることないよね、だれか迎えさ行ってきた人がいろんなこと車の中で教えたんでないのなんて言う人もあるわけ、実はそうではないんだけどっさ…」と、曽祖父の話を始めた。

曽祖父は曾祖母の2年後に亡くなっている。祖母によると、祖母の実家は400年程続いた古い家で、昔はその地域一帯の田畑や山を所有していた。曽祖父はいろんな人の保証人になっていたらしい。しかしある日突然、曽祖父の父、オジ、義兄が漁に出たまま帰らぬ人となってしまう。昔のことなのでよくわからないが、若かった曽祖父は様々な人から土地を取られてしまい、借金だけが残った。曽祖父はクジラ船に乗っておりお金も入ったが、そのほとんどは借金返しに当てた。そのため祖母が生まれ育つ頃の家は非常に貧しかった。

その曽祖父が亡くなったとき、口寄せでオカミサンは、「書き残したいこと山ほどあったんだけども、面倒するから書き残さなかった」と言った。おそらく、子供たちに土地を分与したいと思っても、揉め事になると大変だということで曽祖父はそう言ったのだ、と祖母は解釈している。

「そういうこともあったから、まんざら、オカミサンつうのは口出まかせに言ってるばりとは思えない」と、祖母は少し微笑んだ。

参照文献

鹿島　茂
2003 『勝つための論文の書き方』文藝春秋。
田沼　幸子
2017 「社会人類学演習Ⅱ前期――初の試みとしてのインタビュー作品集」『人文学報』513-2：39-62。

水島 弘子
2011 『対人関係療法で改善する夫婦・パートナー関係』創元社。

---

i うち一本はインタビューを受けた方の希望により非掲載。